

## 私の学生時代

歯学部  
口腔構造・機能発育学系  
組織学分野

教授 入江 一元



私が大学に入学したのは昭和55年、歯学部では最後発の長崎大と岡山大の1回生、北海道医療大学では歯学部の3回生と同期になる。

2年間の教養課程は新潟の市街から約10キロ離れたキャンパス。大学近くの私のアパートは三畳に押し入れを改造した造付けのベッド、共同の台所、風呂、便所(水洗ではない)、周りはスイカと大根の畑だった。2年間だけだったが、寮のような生活だったので、学部の違いや先輩や同級生との付き合いは濃密で、今も交流がある。



スポーツ大会。学年対抗の運動会、スポーツ大会では一丸となって盛り上がった。後列中央(紺のウィンドブレーカー)が私。

歯学部のサッカー部に入り、教養の間は授業の後、市街の歯学部グラウンドに同級生とともに通った。学部に移ると朝8時半から5時まで授業があった。組織学などは4時半まで講義をして、今日は早めに終わってくれるのかと思っていると、実習があることを告げられ、実習室に移動すると標本が7、8枚あって愕然としたこともあった。それでも部活動の時間には実習を切り上げてボールを蹴っていた気がする。各科の実習期間の終わりに班の仲間とともにインストラクターの先生を囲み打上げは楽しみだった。

解剖学実習で大動脈弓からの分枝の破格例に遭遇した。5年生の初めにその症例を学内の会で報告することになり、解剖学講座に通うようになった。歯学部では秋に歯学祭という文化祭を行っていた。毎年5年生が中心となって各研究室に通い、それぞれの研究室に関連した展示や発表を一般の人にも公開するのだ。私は前述の流れで、夏休みも解剖学講座に通い、



細菌学実習打上げ。研究室で行ったもので、後列右端が私、前列右端は本学微生物学分野の中澤先生。

電子顕微鏡を使わせてもらってネズミの骨や自分の血球の写真などを撮った。魅力的だったのは解剖学講座の先生方だけでなく、医学部や歯学部の臨床から研究に来ていた多くの先生や、お中元や何やら研究室に山積みになっていたビールだ。私はせっせと通り、夕方になると先生方とビールを飲み、冷蔵庫が寂しくなると補充した。

時代は少々変わったが、今も講義室や実習室だけが大学ではないと思う。クラブ活動に精を出すのも良い、研究室に首を突っ込んでみるのも良い、そこには講義室や実習室とはまた別の「大学」がある。

# 私の学生時代

今、本学の教壇に立てられている先生たちは、学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。今回は入江一元教授と金澤潤一郎講師のお二人に、当時の様子を語っていただきました。

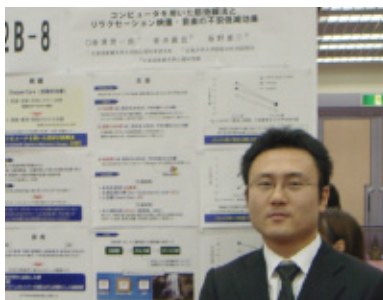
## 私の学生時代

心理科学部  
臨床心理学科

講師 金澤 潤一郎



私は久留米大学法学部法律学科を卒業後、約1年半のアルバイト生活(不安にかられながら英語の勉強もしていました)を経て、2年間、アメリカのバーモント州にある小さな大学に学部留学をしました。それが14年前(2000年前後)。それが心理学との出会いです。その



修士1年時、初めての学会発表。

後、本学臨床心理学科に編入(心理科学部1期生)、そして大学院(修士、博士)を経て現在に至ります。回り道ですが、ある意味で最短ルートだったと思っています。

アメリカの大学は単位取得が難しいため、アメリカ人のルームメイトが就寝後、寮の廊下にバスケットボールを置き、それを椅子に深夜まで勉強していました。留学中には9.11の同時多発テロが起きたこともあり、多国籍の学生達と酒を片手に、政治、歴史観、文化、宗教などについて、楽しく、時にはシリアスに議論しました。自分とは全く違う価値観があり、その相違には背景があることを強く体験しました。

本学編入後は、「まだお会いしていない将来の相談者を想定しながら」授業を聞き、学んだ知識の応用法をいつも考えていました。週末はボランティアサークル「オリオン」を運営して、学生達とボランティア活動をしていました。活動後には皆で遊び、「ボランティアって楽しい」ことを感じてもらおうと試みていました。ちな



留学時代の友人と左から二人目が私。

みに、友人や後輩と参加した球技大会(バスケットボール)で優勝したこともあります。

本学大学院では、信頼できる同期達と助け合いながら、先生方、学内外の先輩方、後輩、何よりも相談者の皆様から多くのことを学びました。今でも同期や先輩・後輩と学会や研修会等で近況を伝えあうのは大きな楽しみの1つです。

海外経験のない家庭に育ち、留学する知人もいませんでした。「アメリカで心理学の勉強を始めたい」と言っていたアルバイト時代には、大学教員になるとは誰も思っていなかったはずですが。縁と運に恵まれてきたことに改めて感謝しています。